

伝列者採集の〈声〉
時代たちの手聞き

阿彦 周宜

声の配達人

—阿彦周宜『天楽丸口伝』の方法—

川島 秀一

およそ「聞き書き調査」という方法を試みた者ならば、口承文芸の調査に限らず、現に向き合っている語り手の一生を描いてみたいと思われる人物に、幾人とも出会うことと思われる。

山形県酒田市宮海で生まれた阿彦周宜（一九四八～一九九三）も、近所に住んでいた芸者石吉田天楽丸と呼ばれた人形遣い師、佐々木時次郎翁（明治三十四年生まれ）から昔話や伝説や世間話を聞く一方で、その人生にも魅せられて、「天楽丸の語り口をそのまま筆録し、年代順に配列してみよう」と思い立ち、六年間もこの翁と膝を突き合わせるようになった。その結晶が、阿彦の民話研究の出発点となった著書、『天楽丸口伝 遊芸の世間師』（天楽丸形保存会・一九八二）である。

この書には、天楽丸の声だけでなく、アサエ夫人（明治四十三年生まれ）の声も、量は多くないが、「アサエさんの証言」として、間隙を縫って登場させている。アサエ嬢は、この書が発行される一年前に急逝するが、阿彦をして、そのとき「なぜアサエさんからの聞き書きも深めなかったか」とか、「この本をもっと早く出

版できなかったのか」（『天楽丸口伝 遊芸の世間師』三一九頁、以下の頁の表記もすべて同著の頁）と悔やませることになった。

また、天楽丸が自身の人生を振り返った「語り口」だけでなく、彼が持ち伝えた口承文芸の一端も、その伝承経路と共に口承文芸の資料集のように掲載されており、それは別表に示したとおりである。さらに、天楽丸夫妻の語り口の合間に、阿彦自身の「取材日記」を組み入れていることも、この書を魅力のある造本構成にしている。阿彦はこのことについて、同書の「はじめに」に次のように記している。

「それから、彼の足どりを少しなりとも確認するために私は取材旅行に出て、彼を知る人々の懐かしい証言を得て、天楽丸の語りの内容が決して単なる自己劇化の産物ではないことが理解できたのである。本書においては時に聞き手の編者が思いついた出を語ったり後日談を述べて邪魔をすることになるかもしれないが、それは語り手の体験談を少しなりとも客観化し立体化しようという試みである」

また、阿彦が天楽丸の伝える口承文芸よりも、その実人生の方に牽引されていた契機については、その「取材日記」の一部に、次のように記している。

①「確かに私は天楽丸に対し、最初から体験談を求めたのはなかった。むしろ、彼の語る笑話や伝説等に胸を踊らせていたのだ。だが、天楽丸の養子時代の話を耳にした今、余りにも奇妙な符合に気が付いた。即ち、孤児同然の孫に祖父が小僧の頓智話を語ったこと。しかも、修学前に聞いたその「和尚と小僧」話の後に時次郎少年を待ち受けていたのが、まさに小僧見習いの生活だったのだ。寺へ養子送りにする孫に〈勉強して、いい和尚になれよ〉という祖父の願いが、これらの「和尚と小僧」話にこめられていたのではないのか。それ故にこそ昔話の世界が天楽丸の実体験と重なり共鳴し、更に物語を記憶せしめたのではなかったのか」〔二六頁〕

②「現在も易断師・高島天楽とも名のる佐々木時次郎翁の姿を「公平の八卦」の話に照らし合わせる時、少年の日の彼を惹きつけた昔話の世界に自ら扮したというドラマを見る思いがしてならないのだ。

一人の人間に昔話がこれほどまでに生きるものなのか。もしかししたら、天楽丸が人形遣い師として独立する時、外題を難なく物にしていくのも、祖父や母親の口承文芸の豊かな土壌が根底にあったからではないだろうか」〔二二頁〕

①は天楽丸が語った昔話の「和尚と小僧」、②は「聴耳草紙」

を思わせる、八卦置きサクセス・ストーリーについて述べている。これらの昔話が天楽丸の実人生に重なり合っているのではないだろうか、と阿彦が考えたことが、「天楽丸口伝」とも付した、佐々木時次郎翁の口頭による自伝の記録を生むことになった機縁である。

この書の「あとがき」には、天楽丸の長男・武雄さんが四十七歳の若さで他界してしまったことから始まっている。「私の手元に残された三十数本のテープには、天楽丸と共に武雄さんの生前の声が入っている」〔四〇六頁〕と、〈声〉という言葉を使用している。また、このすぐ後にも「懐かしい五味堀部落や岩手の人々の声を聞いては目を潤ませていた天楽丸の表情を私は忘れることができない」と、〈声〉の文字が見える。これらの〈声〉は、すべて、テープ・レコーダーに録音した〈声〉のことである。

特に、後者の〈声〉は特異な収集状況を示している。前述したように、阿彦は、天楽丸が宮海に落ち着くまでに転々とした箇所を、主に東北地方を中心に「取材」に歩いている。そして、そこで出会った、天楽丸にゆかりの人々から、天楽丸へ対するメッセージをテープに吹き込んでもらい、この〈声〉を天楽丸に届けているのである。いわば、阿彦周宣は「声の配達人」でもあった。この「配達」の様子を知るに、「あとがき」に記されている「五味堀部落や岩手の人々の声」の具体例を本文から挙げておきたい。

①「元気なうちに、また五味堀に来てください」と言う春日さんや他の婆様達。翌日テープの声に聴き入る天楽丸は目を潤ませ

ながら何度も「ありがとうございます」を繰り返したのだった。

この時の天楽丸の顔を私は忘れることができない」「二八一頁」
②「そして、武田さんは喜寿記念の家族全員のアルバムを私に託し、テープレコーダーにこう語ったのだ。

「佐々木さん、私武田喜八ですが、おかげさまで今も元気でやっています。佐々木さんも体を大事にして長々生きられるようにお祈りしています。」「七五頁」

①は、天楽丸一家が昭和四年から八年まで滞在していた五味堀（秋田県森吉町）の春日トクさんの声である。天楽丸は五味堀菩薩堂で、ご祈祷などをしながら、別当生活をしていたが、天楽丸が岩手へ行って留守のときに、新生児を二人亡くすことになった、苦勞の多い時代であった。

②は、岩手県下閉伊郡中里の武田喜八さん（明治三十五年生まれ）の声である。天楽丸は二十歳のときに石工の職業を捨て、同県岩泉町小本の宗得寺に出家したが、寺の利権争いのため還俗して再び石工になったときの懐かしい同僚の一人が武田さんである。

天楽丸にとっては、出かけて行って会う機会を逸している懐かしい人々に、翁の代わりに阿彦が会い、それらの人々の声を集めては天楽丸に持ち帰っていたことが理解される。これらの声を聞いて、さらに天楽丸が、そのころの時代を語り始めたことは想像に難くない。つまり、阿彦は天楽丸に関わる人々に出会ったことを全て、天楽丸に報告していたのである。これほどまでにして、語り手に接し、絆を結ぶことができたということは、阿彦の一種

の調査方法から生まれたものであった。

阿彦は、「人形遣い師を「人形芸一筋」といった視点だけで捉えてはならない」「四〇四頁」と述べ、「人形遣い師その人（引用者注・天楽丸）の体験をふまえて、「語り手」の側に立った考察がなされる必要を痛感するものである」「四〇五頁」と、今後の課題を挙げているが、口承文芸を「語り手」の側に立つて考察するには、その語り手の体験を踏まえなければならないことを述べている。天楽丸が見て感じた各地の風景を、阿彦が追体験するよう「取材」を重ねた大きな理由である。

この、語り手の側に立った考察として、本書で印象的な部分は、天楽丸の夫人、アサエさんの、次のような「文化財」に対する「証言」である。

「まだ、よそさ喋てねんども、「文化財」どが言つて、この人形芝居を「昔のやり方でやれ」つてそのままやて行がねばねということはねなや。わしどしての考えだよ。そうでなくこの人形の遣い方覚えれば、今の話で芝居作つてやれるなよ。んだから、必ずこうやつてくれ」つて教えるまでねえ」ど思う。（人形の遣い方覚えれば、同じ遣い方でも今の時代さ合わせてやつた方がええ」ど思うよ。そうすれば、おら家のジツチャ（天楽丸）死ねば、「やり方がらんね」つて言わねたつてええしね。これは私ひとりの考えだよ、まず……。武雄がやた『アriba』は、子供の教育劇で作つたんだ。んだから、そやて今の時代に合わせた方が長く続いて行ぐど思う。何も「文化財」つ

てことでなくでも……。『文化財』たつて、生活楽なるわけでもねし……」〔三二五頁〕

『アリババ』とは、世界名作童話の『アリババ物語』のこと、学校教育劇の新境地を開き、「昭和三十二年以来、東北地方はおろか千葉県内の学校でも児童達を熱狂させた」〔四〇二頁〕という。このことを阿彦は「そこには周囲の人々が口にする『保存』や『文化財』という消極的な形を超越して、より寛大な境地に達した天楽丸夫妻の真意を私は感じた」〔三二六頁〕と記した。

特に、昭和四十九年に秋田県の無形民俗文化財に指定された「猿倉人形芝居」が天楽丸の父吉田若丸によって創始されたにもかかわらず、「猿倉人形」の名の背後に隠れてしまった天楽丸親子のことを思うとき、「文化財」とはいったい何かということを考えさせてくれる。

また、『アリババ物語』などの書から、新たな人形芝居の台本を作成するという、文字を通した伝承についても、注意をしなければならぬものと思われる。表1の「佐々木時次郎翁の口承文芸と伝承経路」を見ると、天楽丸は講談本や講談師からも話を得て、自家薬籠中のものにしてから、やがては人形芝居にもそれを活かしていくことになる。

さらに、天楽丸の伝承世界に大きく影響を与えた、家族からの伝承内容を見ると、祖父の佐々木岩蔵からは「和尚と小僧」などの笑い話を伝承されているが、父母が伝えた話は、講談に近い話であった。母のミキからは、「お里沢市」・「岩見重太郎ヒヒ退治」・

「鬼神のお松」・「信夫山の七色狐」阿部の童子丸」などの話、父の池田与八からは、「中山安兵衛」・「自来也」・「白井権八」・「孝子の仇討」などが、そのすべてである。これらの話は、講談で語られ、あるいは講談本に載せられる話が多く、天楽丸の父母たちも、これらの世界に深く影響されていたことがわかる。

天楽丸の口承世界の全体が幾分、伝説や笑い話に傾いていると思われるが、講談本などの文字文化を通して、口承世界が豊かになつていくことは、文字が必ずしも口承世界を駆逐しないということ、再度、確認させられる事例である。

「語り手の側に立つた考察」は、口承文芸の研究にとつて、今後も深めていかなければならないテーマである。調査者が聞いた（口承文芸）とは別に、語り手にとつて聞いてもらいたい話とは何なのか。阿彦はおそらく、天楽丸から口承文芸を聞きながら、同時に彼が自ら迫力をもって語る自叙伝に、心を傾けていったものと思われ、その成果が『天楽丸口伝 遊芸の世間師』という書であった。迫力をもった語りとは（声）のもつ力であり、天楽丸にとつては、人形遣いという芸能を支えていた声の力であったに相違ない。

（かわしま・しゅういち／宮城教育大学非常勤講師）

表1 佐々木時次郎翁の口承文芸と伝承経路

伝承経路	口承文芸の題目
祖父 佐々木岩蔵	一休問答 小僧三人、餅二つ 和尚の裁判 ゴヘラのゴン 小僧の屁理屈 馬鹿髯の三晩 六平の八卦 法螺つぎくらべ 片倉小十郎の頓智 俄武士・太郎 法螺吹き岩吉さん 間男殺しの後始末 清助さんの狐退治 頓智組長 金田一伝説
	磬次磬三郎の話 マタギの刀立の法 真言密法の奥の伝
母 ミキ	人形節
	お里沢市 岩見重太郎ヒト退治 鬼神のお松 信夫山の七色狐—阿部の童子丸 鑑鉄坊さん傘踊り
父 池田与八	中山安兵衛 自来也 白井権八 孝子の仇討
[講談本]	亀山孝子の仇討 南部恐山孝子の仇討 孝女白菊
講談師	親を買う話
大黒舞いさん	大黒舞い唄
石屋師匠 佐々木徳松	女郎狐に化かされた話 上下の狐
石屋仲間 瀬浪福松	デンガク豆腐の好きな和尚様 馬鹿息子の修行 常安寺の化物退治
宗得寺和尚 中島放牛	化物狸の祟り 殺した女の祟り 因縁の重なり 盲の六部の祟り
久慈の神官様	死んだ息子の引き合わせ
口寄せイタコ オナカ	イタコの口寄せ唄
「神憑ぎ」 佐々木トク	宝物の夢知らせ 山の水の教えと因縁
中島のお婆さん	狸の祟り
下市神の大場鉄三の父親	じゅんこ地藏
宮海の鑄物師のお婆さん	二カ所地藏 戊辰戦争秘話と廃物毀積
宮海の佐藤与吉	五行の塔と漁師たち 出雲の流木と十一面観音
宮海の佐藤与次郎	酒田大地震聞き書き

注：「口承文芸の題目」は『天楽丸口伝』の表記に従った。